

エイジフレンドリー秋田市

—粘り強いこの都市は、日本の超高齢社会の最前線で、その運命に立ち向かっている—

P. 116 秋田市は、日本最大の島である本州の北西に位置し、日本海沿岸にある。人口32万人余りの小さな都市で、東北地方に位置し、自然豊かで美しい景観と雪で厳しい冬で知られる北部の地である。

P. 117 ■写真解説

- ・高齢者が見晴らしの良いポートタワーセリオン（143m）から水平線を見渡す。（前ページ写真）
- ・寒風山の頂上からの秋田市を一望、日本海に囲まれ豊かな水田が広がる。

P. 119 ■写真解説

- ・秋田市に住む70代の高橋さんと佐々木さんはお茶会に参加するため秋田市役所を訪れた。
- ・ポートタワーセリオンからの秋田市の眺望。
- ・起業精神に溢れた高齢者は地元の観光客向けに軽食屋台を開いている。（前ページ写真）
- ・コインバス事業が実施されている路線バス。
- ・秋田駅中央改札、特急や新幹線が発着し、東京まで4時間強で行ける。

本文

秋田市の武器は粘り強さだ。

今住んでいる人、残ることを選択した人、戻ってきた人、彼らの多くは、長年、間違いのないコースで働き続け、（人口減少や少子高齢化という）人口統計データの運命に屈することを拒み、この街の運命に投資し続けている人々だ。

日本では高齢者、すなわち65歳以上の人が人口を占める割合は27.7%で、世界で最も高い。秋田市はそれを上回る29.4%、秋田県では34.7%と驚異的な高さだ。

変化は急速に、実質的には世代に関係なく訪れた。若者は伝統的な産業である農業や林業、漁業などには全く関心を示さず、どんどん東京若しくはそれに近い大都市に移り住んでいる。彼らは、急速に増えている高齢者と減少した労働力に適応するため緊張し続けている地域の地域経済に背を向け、去っていった。

こうした高齢化の兆候は、今至るところで見られる。路線バスの中は高齢者ばかりが目につくし、高齢となった農家は一人で農作業に取り組んでいる。コミュニティセンターでは、シニアグループが日本伝統文化の練習にいそしんでいる。秋田市は新幹線を使えば東京から4時間強の距離であるが、そこは都会とは全くの別世界が広がっている。

しかし、秋田市が持つ武器は粘り強さだ。今住んでいる人、残ることを選択した人、戻ってきた人、彼らの多くは、長年、正しい道を歩み、働き続け、人口統計データの運命に屈することを拒み、この街の運命に投資している人々である。秋田市長は、高齢化問題に詳しい兄からの情報提供を取り入れながら改革的な舵を取り、「エイジフレンドリーシティの推進」を市が取り組むべき重要事項とした。取組の成果の兆候は街のあちこちで確認できる。例えば素晴らしい新庁舎は、アクセシビリティのシンボリックな意味合いをもち、コミュニティ活動の再活性化の中心的存在となっている。エイジフレンドリーシティプログラムは、高齢者をはじめとするあらゆる人々にとって住みやすい環境を整備するため、市役所の4人のチームが中心となって進めている。彼らは、自身も将来「秋田市に住んでいて良かった」と思えるようなまちづくりを目指している。

P. 120 “秋田市での仕事を通して、私は高齢者に貢献し続けたいと思っています。医師として高齢者の健康に大きな関心を持っていることはもちろんですが、それだけではありません。高齢者の幸福に関するもの全てに関心を寄せています。”

－ 穂積恒氏（医師）

穂積恒氏は、秋田市におけるエイジフレンドリーシティ推進の立役者である。穂積氏は、一つの病院、三つの老人ホーム、二つの認知症患者用グループホームを運営している。また、NPO法人であるFOIFA JAPAN（Friends of IFA、IFAはInternational Federation on Aging）を設立し、活動している。

■写真解説

- ・秋田市の中心部から北部にある、旧雄物川と日本海に囲まれて立つ製紙工場。
- ・秋田港にある観光施設のガラス張り屋内公園、旧雄物川で釣りをする男性、地元マーケットの広場での伝統舞踊の披露、夜の秋田駅、郊外に広がる秋田杉林。

P. 122 エイジフレンドリーシティ秋田の取組

毎週2回の牛乳配達の小松恵子さんにとって、唯一外部との接触の機会であることから、福永志保さんが配達時、彼女の体調などを心配して尋ねてくれることをとても喜んでいる。小松さんは気がついていないかもしれないが、このゆるやかな見守りは福永さんの会社が、秋田市のエイジフレンドリーを推進し、地域社会に貢献するために行っているもので、今後、国際的なモデルにもなり得る事例だ。

■写真解説

- ・福永志保さんは、85歳になる小松恵子さんのお宅に牛乳を配達する。彼女は、お昼までかけて40軒余りを配達している。

P. 124

福永さんが勤務している会社、南山デイリーサービスは、秋田市が進める、高齢者等にやさしい取組を民間事業者が推進するという、エイジフレンドリーパートナー事業に登録している。この事業で、いくつかの参加企業は高齢者の雇用を積極的に進めている。また、南山デイリーサービスやほかの企業は、通常の業務内容のほかに地域社会に貢献できることを業務に取り入れている。結果、小松さんは、何かサポートが必要な時、日頃、牛乳配達をしてくれる福永さんがとても頼りになる存在であることが分かり、一方の福永さんは、仕事に新たな意義や価値を見いだしている。

2011年、秋田市は国内初のWHOエイジフレンドリーシティグローバルネットワーク参加都市になった。穂積志市長は、NPO法人FOIFA JAPAN代表を務め兄である穂積恒氏とともに、高齢者を、支えを必要とする存在から、社会を支える存在にシフトさせ、さらにたとえ助けが必要になっても尊厳を持って生きることができると社会づくりを目指すこととした。“私たちは、自分たちの将来を完全に否定的に受け止めるのではなく、もっと明るく希望を持てるものにするために、新たな取り組みや政策を打ち出したのです。”と穂積志市長は語った。さらに”私たちの寿命は長くなっており、いかにセカンドライフを充実したものにするかと言う新たなモデルを、この秋田市から世界に向けて提示できると考えています。”と続けた。

■写真解説

- ・秋田市役所庁舎(センタース)では、高齢の市民グループの盆栽愛好会が細心の注意を払って丁寧に作品を陳列していた。
- ・南山デイリーサービスの配達員。

P. 125

■グラフ

- ・秋田市の高齢化率の推移
- ・年齢分布

■秋田市の概要

- ・市章
- ・地域
東北
- ・人口
312,944人(男147,436人 女165,508人)
- ・総面積
906.09km²
- ・気候
日照時間 1,526時間
降雪日数 98.8日
降雪量 377cm
降水日数 195.6日

・一人あたりの平均所得

秋田市 291万2千円

秋田県 246万7千円

・産業

第一次産業（農業・林業・水産業）

5,886人/0.5%

第二次産業（鉱工業・製造業・建設業）

167,555人/13.1%

第三次産業（金融・保険・卸売り・小売り・サービス業・情報通信業）

1,101,461人/86.4%

・年齢分布

0歳から14歳 34,352人

15歳から64歳 182,728人

65歳以上 90,610人

記録無し 5,978人

P. 126

秋田市エイジフレンドリーシティ行動計画は行政と市民・民間の参画によって策定されている。“アクティブ・エイジング”を目指す市民の計画は、高齢者の孤立防止やエイジフレンドリーシティへの理解を深めてもらうため、店舗や施設など、様々な場所で活動を展開している。エイジフレンドリーシティのシンボルマークデザインを決定する際には、実に13歳から80歳までの幅広い世代から応募があった。

人口約32万人のうち65歳以上の高齢者が約30%を示す秋田市や、さらに高齢化率の高い秋田県が、対応を行うことに疑問の余地はない。若者は地方の田舎に仕事を見つけることができず、大都市へ移り住み、それがまた高齢化に拍車をかけている。しかし、秋田市は強い意志とエネルギーをかけて、この局面に対する責任を果たすことに真正面から取り組んでいるのだ。

高齢者をはじめとするあらゆる市民が利用しやすいよう、秋田市は2016年に新庁舎を建設した。正面玄関では、音声ガイドがドアの開閉を知らせ、障がい者用駐車場やバス停留所からの入り口までの傾斜面は屋根付きである。また、車椅子や歩行器が、庁舎内用に準備されている。庁舎内のサインは大変わかりやすく、経路は明確に示されている。車椅子が通るスロープなどは冬期間滑らないように融雪対応している。ちなみに市内全域においても、60か所余りが融雪対応の道路になっている。

こうした施設・設備の改善に加えて、秋田市のエイジフレンドリーシティの主な取組は、様々な組織（自治会や老人クラブ、ボランティア団体、NPOなど）の強化とコミュニティ施策と言ったソフト事業と呼ばれるものがある。4人の市のエイジフレンドリーシティ推進担当の一人は、「市の仕事のほとんどは、通常、法令に基づいて行われている」とした上で、エイジフレンドリーシティの実現という難しいがやりがいのある課題は、法令に基づくものではなく、自由な発想でチャレンジできると語った。担当課長の斉藤恵美子氏は「退職後の人生において、人と

の繋がりを保たなければ孤立し、孤独に陥ってしまう。今の仕事は、自分たちも高齢期になった時に、地域や人と繋がりを持ち続けることができる社会づくりへとつながっているのだと感じながら仕事をしています。」と語った。

計画策定や実施に一定の時間を要する施設・整備などハード面の改善とは異なり、いくつかの取組は即効性のある結果を生み出している。代表的な事例は高齢者コインバス事業であり、これは高齢者の外出促進を図るため、市内路線バスの利用料金を100円という定額にしたものだ。本事業は2001年から70歳以上を対象に始まったが、68歳以上に引き下げると利用者は11.4%上昇し、さらなる利用の増加を見込んで、2017年10月から、対象年齢を65歳以上まで引き下げて実施することとした。

■写真解説

- ・新しく建設された市庁舎。
- ・この建物は、フロントのコンシェルジュサービスから、待合椅子に準備された杖ホルダーまで、まさにアクセシビリティと包摂が細部まで行き渡ったデザインとなっている。

P. 128

“現在、若者の人口と出生率は低下しています。行政として、我々は将来を悲観的に捉えるのではなく、将来を明るくとらえることのできる方針や取り組みを打ち出す必要があります。秋田から世界の他の国々でも取り組めるような事例を打ち出していきます。” 穂積志市長

コインバス事業は、エイジフレンドリーパートナー事業とも連携しており、一部のパートナー事業者の店舗や施設では、コインバス資格証を提示すると、ドリンクサービスや商品の割引等の特典を受けられる。さらに、秋田市は新たな取り組みを検討している。高齢者による起業や新たな分野での労働、社会参加、ボランティア活動など、退職後の多様なセカンドライフを支援するため、ガイドブックを作成することや、高齢化に伴うユーザーニーズに対応した製品やサービスづくりを行うための試みとして「リビング・ラボ」プロジェクト等の導入を検討しているのだ。穂積市長は、今後の技術革新によって、秋田市の高齢者の生活が最適化され、よりよい生活を送ることができるようになることを期待している。10年後には、現在の仕事の約半分はAIに置き換えられる可能性があるのではないかと彼は予測している。“たとえそうであっても、高齢者が持つ技術や経験などのスキルは、リタイアせずに働ける事ができる高いレベルのもので、もっと活用していくべきです。”

このような市長の思いは、市民の高橋 茂さん(64) のコメントにも共通して、現れている。「私はまだ自分自身が高齢者と思っていないし、これからの高齢期の具体的なイメージはまだ沸きませんね。」と話してくれた。

■写真解説

- ・エイジフレンドリーシティ公約について語る穂積志市長

- ・2,547人の職員が働く市庁舎、自然災害時に市長が監視および対応を行う防災対策本部室、エイジフレンドリーシティ推進担当メンバーの4人、市庁舎外のバス停まで続く屋根付きスロープ、庁舎内にある子育て広場の職員

P. 130 **日常のある日 嵯峨 奈津子, 81歳**

P. 133 嵯峨奈津子さん、81歳、一人暮らしとなって28年となる。心臓発作で夫が急逝後、彼女が唯一知っていた専業主婦という役割から外へ飛び出し、自分を変えなければならなくなった。嵯峨さんは市役所に仕事を見つけ、その後は、ブティックで洋服販売員として働いた。退職後の現在は、多くの趣味を持ち、友人との約束で毎日の時間がほぼ埋まっている。例えば、社交ダンス教室に行く日を見てみると、まずは毎朝の日課である髪の設定を始める。カーラーを髪から外し、逆毛を立ててセットする。次に、居間にある夫の仏壇に手を合わせる。まるで今も最愛の夫と共に暮らすかのように。そして、豚肉と野菜の炒め物をつくり軽めの昼食をとる。

P. 135 彼女は髪を設定することをとても大切にしている。例え近所のスーパーに出かけるだけであっても、きちんと身支度を整えることに気をつかう。そして、何かしら毎日外出することも同じように心がけて実行している。家では一人なので、できるだけ忙しくなるように工夫しながら暮らしているのだ。
平日は、2時間ほどの社交ダンス教室に行き、友人と会う。彼女は、様々な色のダンスシューズを6セットも持っているほど、社交ダンスにはまっている。

P. 137 レッスン後の夕方近くには、街中に繰り出して、いろいろと用事をたす。スーパーマーケットの駐車場ではバツタリ友人と出くわして、会話を楽しんだ。翌日分の食料を少しと、夜にカーラーを巻きながらビールを飲むのが何よりの楽しみなので、一本缶ビールを買って帰る。いつも行くスーパーは、彼女の家からわずか7分のところにある。59歳になる嵯峨さんの娘は、度々、一緒に住むように勧めたが、嵯峨さんはずっと拒み続けている。とても便利なところに住んでいることや、たくさんのカラオケコレクションや大切に育てている鉢植えの植物など、快適に過ごすために必要なものに囲まれながら、気ままに楽しく暮らしている。